

## ふっくらアートを生み出す軌跡とは

中野 理恵

フェルナンド・ボテロは今年90歳になる南米コロンビア西部の町、メデジン生まれの画家・彫刻家である。ボテロが描くと、キリストは物思いにふける悲壮な風情など、どこへやら、ぽっちゃりとして幸せそうな表情になり、枢機卿は生真面目で几帳面な外貌なのだが、やはりふっくらしていて、ときにはバスケットに寝たりしてしまう。そのコントラストが面白い。モナ・リザに至っては神秘的な微笑みとは裏腹な、ふっくらして満足げな眼差しで、小学生くらいの子どものいる近所の仲良しおばさんに見つめられているような気分になる。犬も猫も、ときには花や置物に至るまでもが丸みを帯び、後年、始めた彫刻も、同様にぽっちゃりしているのだが、見ていると気持ちが穏やかになっていく。他に例のない作風だ。

本作は、現在も毎日アトリエに通い描き続けているボテロ本人と、フェルナンドとホアン・カルロスのふたりの息子、ひとり娘のリーナ、そしてキュレーターやアーティスト、作家、研究者たち等による語りと、数々のボテロ作品により構成された、いわば彼の“ボテリズム”の極意に迫るドキュメンタリーである。面白いのは、ひとりだが、彼の画風を「不快だ。食品会社のキャラクターのようだ」と、不愉快でたまらない、とでも言いたいような苦み走った表情で語る大学教授が登場している点だ。

少年時代には闘牛士を目指していたという彼は、闘牛士になるための訓練より、牛を描くことに熱中してしまい、長じて闘牛士にはならず、イラストレーターをしながら画家への道に研鑽を重ねてゆく。ヨーロッパに渡り、スペインではベラスケスやゴヤなどの巨匠の作品に触れ、パリではシャンゼリゼを歩き、イタリアではピエロ・デ



© 2018 by Botero the Legacy Inc. All Rights Reserved

ラ・フランチェスカに惹かれ、フィレンツェに移住したが、3年後、お金が無くなって仕方なくコロンビアに帰国。しばらく後に、今度はメキシコで暮らす。そのメキシコで彼は強烈な体験をすることになった。ある日マンダリンを描いていた時、開口部を小さく描いたところ、マンダリンが膨れ上がって爆発したように見えたのだ。この体験が彼の画風に影響を与えたのだろう。

「芸術は楽しむためにある」を貫き、楽しく描く日々を送る彼の前に試練が訪れる。再婚相手のシシリアと間に生まれたペドリートを交通事故により、僅か2歳で亡くしてしまい、自分も利き手の左手の自由を失ってしまった。どんなにか苦しかったことだろう。彼は何枚もペドリートの絵を描いている。またイラクのアブグレイブ強制収容所で起きた米軍による捕虜虐待を題材にした絵画も強烈だ。

本作で紹介される彼の絵画を堪能したのだが、アブグレイブをテーマとした作品には圧倒された。強いメッセージを発信していたのだ。現在、ウクライナで起きている出来事がボテロの筆では、どのように描かれるのだろうか。

### 《Cinema Information》

#### 『フェルナンド・ボテロ 豊満な人生』

カナダ映画(82分)／監督：ドン・ミラー／4月29日より Bunkamura・シネマほか全国順次公開

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。